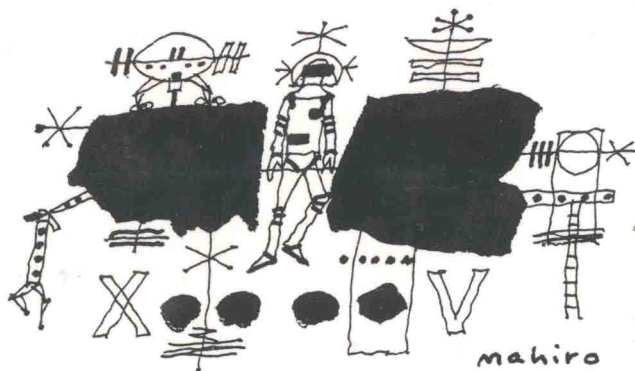


● 日本SFの軌跡

宇宙塵傑作選

I

柴野拓美／編



出版芸術社

宇宙塵傑作選 I

宇宙塵傑作選 I

宇宙塵傑作選 I

宇宙塵傑作選Ⅰ 日本SFの軌跡

発行日 平成九年十一月三十日 第一刷

編者 柴野拓美

発行者 原田 裕

発行所 株式会社 出版芸術社

東京都文京区音羽一―一〇―四 池田ビル

郵便番号 一―二―

電話 〇三―三九四四―六二五〇

FAX 〇三―三九四四―七四六〇

振替 〇〇―一七〇―四―五四六九一七

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

近代美術株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は、送料小社負担にてお取替えいたします。

©柴野拓美 一九九七 Printed in Japan

ISBN4-88293-147-8 C0093

宇宙塵傑作選――日本SFの軌跡

黄昏の町	渥見 凡	5
りんご	泉十四郎	17
水の魔物	石川英輔	21
博物館にて	小隅 黎	37
逃亡者	小野耕世	39
愛	宮崎 惇	49
副作用	川島ゆぞ	57
助かった二人	石原藤夫	79
カステイリョ・ゴメスの脚	草下英明	83
赤い花	松田芳勝	99
テスト	槇 敏雄	107

イリ・エネルギー販売店……………光瀬 龍 123

歴史函数……………眉村 卓 131

順応性……………堀龍之&堀晃 145

火星航路……………星 新一 151

渦巻……………山野浩一 179

聖母再現……………光波耀子 185

環状線……………筒井康隆 201

三月来たる……………嬉野 泉 207

コンタクト・ゲーム……………大場 惑 251

あとがき……………柴野拓美 299

装幀

—
江口まひろ

黄昏の町

渥見 凡

渥見凡（あつみ・ぼん）

一九三一年生まれ。本名・吉田要。「宇宙塵」発足の母体となった「日本空飛ぶ円盤研究会」の会員だった縁で創刊と同時に参加。その前はミステリ同人誌でも活動（今井利夫名義）していた。当時の本職は土木工事の現場監督だった由で、かのシュワルツネッカーを少しやさしくしたような人物に「地球の彫刻家です」と自己紹介されたのが印象に残っている。

本誌には、「ロボット星」（二―三号）を最初に短編一五編を発表。本編「黄昏の街」（原題「怪談の街」）は一二号に本名で掲載後、「街」と改題されて電波雑誌に転載された。また創刊の翌年、同人数人が交代で「科学画報」誌に短編を載せたときにはその一編「未来人」を執筆。

（柴野）

秋の夕暮れ時は、何か妙に白々として、空虚なものを感ぜさせる――。

私は、公園の古びたベンチに腰掛け、煙草をふかしながら、グランド上の子供達のソフトボールを、唯ぼんやりと見るともなしに眺めていた。

やがて来る冬の予告の落莫たる秋風のためか、それとも無心に遊び興じる子供達の嬉々とした歓声に、遠い少年の日の夢がふと甦えたのか――いつか私の胸にも、何やらほのかな郷愁の想いがジンジンと湧いて来るのだった。

そんな放心状態の私だったから、近寄って来た聲音が、すぐかたわらでピタリと停った気配にもついぞ気が付かず――「もし……ちよつと……」と陰気な男の聲が耳もとで聴こえた時には、大げさな話、ビクツと体が慄えるほど驚いたのだった。

ベンチのすぐ横に、長い細々とした影を地に引いて、一人の男が悄然として立っている。三十才位、紺背広の一見会社員風の男だが、どうした事か、頭髮はクシャクシャに乱れ、顔色は鉛色に憔悴し、両眼は物狂わしく血走り、ネクタイは紐のようになっている。

私は男の挙動に、只ならぬものを感じて、警戒本能が五体をキュツと引きしめた。

「あの、ちよつと、妙な事をお聞きますが……」

男は何故か遠慮勝ちにオズオズと云った。その言葉の調子には、何やらすがりつくような、粘っこい必死なものが感じられた。

「え、何ですか？」

私は薄気味悪さを覚えながら、つとめてブッキラ棒に、豪胆そうに答えた。

「この市の名は何というのです？　もしやK市じゃないでしょうね？」

「此処はT市ですよ」

私はソツ気なく云った。T市の中心地に居りながら、市の名前も知らないなんて――旅行者にしては、男の体の何処にも「旅」の匂いが全く感じられないのである。

「ああやつぱりそうじゃないんだ！　誰一人として僕にK市だと教えちゃくれないんだ！」

男は、私の返事を聞くや、こゝろ悲痛な声音で叫ぶと、崩れるようにベンチの端にドサンと腰を降し、両手でしっかりと顔をおおってしまった。両肩がビクビクとけいれんするのは、泣いてでもいるかのようだった。何ともはや絶望的な男の態度ではないか。

この男の不可解な挙動を注視していると、私は気味悪さよりも、好奇心の方が勝を占めて、ベンチから立上るのをやめた。どうも私という男は、お節介好きな

因果な性分らしい。

「君、ど、どうしたんですか？ 気分でも悪いんですか？？」

すると男は顔から手を除け、スツと体を起し、ねばつこい視線で凝つと私を見詰め、そして哀願するような調子で、

「埼玉県K市、貴方は全然聞き覚えがありませんか？」

「知りませんね、そんな市が、この埼玉にあったかしら——？」と首をかしげると、

「隠さないで下さい。本当に本気でそういうのですよね？」

又、いやにしつこい。

「そんな事、嘘ついても仕方がない——K市なんて私は初耳ですよ。じゃ近頃市町村合併が何んかで誕生する市ですかね？」

男は、ホツと大きな溜息をついて、

「実は貴方、K市というのは、……此の市なんですよ！」

「冗談じゃない、ここはT市です」

「そ、そうです。現在は確かにT市です。でも……」と眼をショボつかせる。

うんざりとして

「以前もやっぱりT市でしたよ」

「いや昨日までは、この市にK市があったのです」と、やけに強情だ。

「君のいう事は、さっぱり判らない。ここは私の生まれる前からT市なんですよ。君、ちよつと間違えているんじゃないの？」

私は、この男との奇妙な問答に、内心当惑しながら、この男、もし精神異常者ではないか？ という危惧が心を掠めた。

男は、さも大事な事を打明ける風に、グツと顔を私に近付けて、

「実はK市というのは、消失しちゃったんですよ！」

怖い程、真剣な表情で、私をどきりとさせた。

「えッ！ 消えた？」

「そうです。こつせんとK市は、この世界から消滅したんです！ それ以外に考えようがない——」

「？ ？ ？ ？」

私は思わず眉をしかめた。狂人だ。とんだ男の話相手になったものだ。さつさとペンチを離れた方が無難であるらしい。ソツと腰を浮かし始めた時、男がサツと手を伸ばして、私の腕をギュツと掴んだ。いよいよいけない。

「ねえ貴方、こんな不思議な話ってあるでしょうか！

僕の住んでいたK市が一晚で何処かへ消えちゃったんですよ。この市の誰一人として、K市の存在を確認してくれる人はありやしない。みんな僕を氣遣い扱いにするんだ！でも僕は狂人じゃない。立派な正気の男ですよ。それなのに……」

「へえ——でも……」

「僕には、今もって貴方達が全部共謀して、この僕を大掛りなペテンにかけているんじゃないかという疑いが去らないんです。でもそんな筈がない。そんなトリックを用いて迄、僕を欺む必要がない。——すると僕が昨夜体験した事件は全部真実なんです」

「そいつは一体どんな事件なんで？」

私もこんな質問をした後で直きに後悔した。男は金魚が辛子水をなめたように意気込み、昂奮の口調で、「そうだ！貴方なら、きっと僕の体験を理解してくれそうだ。ね、お願いです。是非聴いてくれませんか？」

何と必死の眼差しで、涙を浮かべんばかりである。

こう迫られては運の尽き、私も男の腕を振払って退却する勇気を欠いてしまった。仕方がない。到頭私は観念して、この風変りな男の、異様なお話を、いやでも聞かざるを得ない破目となった。——

——申し遅れましたが、僕の名前は今井利夫、この市の郊外にあるF工業に勤めています。え？F工業なんて知らんと仰有る？……そうでしょう、皆さんは御存知ないでしょう。でも本当にK市には在ったのですよ。唯、僕を巡るK市の世界は、何もかも一晚で消失しただけなんです。まあ一応信じて下さい。

この市のB町には、いやT市じゃない、K市のですがね、——僕の小さなホームがあり、今年結婚したばかりの妻の好江が独りで、僕の掃宅を待っている筈なんですが……ああ今頃どうしている事か——。考えても氣が狂いそうですよ。——

そうだ、最初から出来るだけ詳しくお話しましう。

——昨日の夕方まで、平常と少しも変った所はなかったんです。朝七時半、玄関を出る時も、何の不安も変事の前兆も感じられず、僕はいつものように軽く妻のほおにキスして（あ、いやノロケて御免なさい。まだ結婚して半年しかたっていないんです）——「行つてらっしゃい」と妻の明るい声に送られて家を出ました。市内バスに乗って十五分、F工業に到着です。

珠算をはじき、数字を記入し、昼休みには同僚達とキヤッチボールをして遊び、夕方になって軽くなった靴を下げて再びバスに乗り我家に帰る。何の波乱もな

い、毎日々々お定まりの平凡無事なコースです。そのコースが何が原因か、神様の悪戯なのか、次元が狂ったのか——僕をこんなひどい目に合わせ、野良犬みたいに惨めな有様で我家を求めて、一晚中市内を彷徨するような破目になろうとは——ああ！

午後六時、僕は市内本町停留所で同僚達とサヨナラし、バスを降りました。そういえばあの時、何かムシが知らせたんでしょうか、僕は暫く立止って、走り去るバスを見えなくなるまで見送ったことです。あのバスが、僕とK市を結ぶ唯一の絆であるとは夢にも知らずに——。

バスは薄青い排煙を残して、すぐに町角を曲って見えなくなりました。

さて、僕は当然のように踵を返し、我家への道を辿り始めたのです。もう日はとっぷりと暮れて、暗紫色の空には宝石のような星々が輝き出し、家々の灯も暖かくともり、商店の店先にも種々の品物がはなやかに色とりどりに輝き、ネオンサインも、浮気な女のウインクみたいにパチパチ瞬いているし、すれ違う人々も、雑踏の中をスイスイと魚のように軽快に歩いて行きます。小さいけれども綺麗な市、三十年も住んでいる市なのに、又今夜は知らない町にでも来たように、いやに新鮮な感じがするな——フトそんな思いが僕

の胸を走りました。しかし別段変った所もない、いつも通り慣れた家路です。

途中で僕は煙草を切らしている事に気がつき、路傍の煙草屋へ立寄ったのです。店先きに、若い娘が一人雑誌を読耽っていました。その店は、私の親類で、看板娘のミッチちゃんは、よく僕の家にも遊びに来る娘です。

「ミッチちゃん、新生一つおくれよ」

僕がこう声をかけると、夢中で映画雑誌にかじりついていて娘が、ツと顔を上げました。すると僕はちょっと照れくさくなった。ミッチちゃんじゃないのです。全然見も知らぬ娘なんです。その娘は、おかしそうにニコニコ笑いながら、でも愛想よく煙草を手渡ししました。

僕はすぐに、ああこの娘、ミッチちゃんの友達なんだ、恰度遊びに来ていて、ミッチちゃんが何かの都合で座をはずしたので、応急の店番をしたんだナ——と気がつきました。それでもう別に気にも止めず店先きを離れました。パン屋の前まで来た時、そうだ好江の奴は、クリームパンが大好きだっけ、と思いつき、買いに入りました。パンの包を下げて店を出た僕は、何の気なしに包装紙に目をやると、妙な事には、いつもの木村パン店でなく、松本パン店と印刷が変っているの

です。おやア？ 怪訝に思った僕は、店の看板を見上げました。大きな字で、松本パン店です。ハテいつから店替りしたんだらう？ ついぞ気がつかなかったが――。何しろせまい町です。経営者でも替れば、すぐに噂さが拡がる筈なんです。いや、今朝もこの前を通った時には、確かに木村パン店となっていたようだぞ？ 僕の脳裏の片隅で、そんな一抹の疑惑が走りましたが、しかし別段僕が再び店に入って、店員達に一切を訊く程の重大さでもあるまいと考え、心に多小のわだかまりを覚えながら又歩き出したのです。

我家から二百米程に近づいた時に、向うから妻が、一人の若い男と話しながら、此方へ歩いて来るのを見つけました。エプロン姿に買物籠なら別段不思議ではありませんが、何と妻は綺麗にお化粧し、洒落れた外出着を着込んでゐる。一体これから何処へ出掛けようとするんだらう？ 亭主のお帰りの時刻だというのに――。僕は不審に思いました。それに妻と睦まじく語合っている連れの男、僕の知らない男です。しかも二人はよそ目には、まるで恋人同志かなんかのように、仲良く楽しく気にイソイソと歩いて来るのですよ。

僕はツカツカと二人の方へ歩いて行きました。僕が二人の真前に立塞がりますと、二人は話をやめ、僕をチラッと一べつし、そ知らぬ顔で、そのまま僕のわ

きを通り抜けるじゃありませんか！ これじゃあんまり亭主を踏みつけにしたやり方です。僕も些かムツとしました。

「おい好江、今時分一体何処へ行くんだい？」

きつと僕の声は、かなりトゲトゲしかったに違ひありません。しかし、こう僕が詰問した時の、女房のお芝居の完璧さといったら！ 正に名女優そのけでした。妻は、ひどく驚いたように目をパチパチさせ、救いをもとめるように、かたわらの男の方を見るのです。その男は、グレイのスーツの襟元から粗いチエツクのシャツなど覗かせた、いや味な野郎で、しかし口惜しい事には、どうやら僕よりは少し二枚目なんです。だから僕がよけい嫉妬を感じたのでしょうが――。

「いやに化粧めくしてさ、お前夕食の仕度は出来ているの？」

するとどうでしょう、妻の奴、仔鹿のようにおびえた表情になって、オドオドと男の背中のかげに隠れるじゃありませんか！ 亭主を馬鹿にするのもホドがあります。僕は思わずカツとし、前に進み出て妻の腕を掴まえようと思いました。すると、その男は妻をかばうようにして僕の前にズイと立ち塞がったのです。厳しくとがめるような目つきです。そして男は軽蔑するよ

うに、

「失礼ですよ、君、人違いでしょう！」と云うじゃありませんか。

「何ッ人違いだつて？ 冗談いうな！ それより君は誰だい？」

僕は、このニヤケた二枚目男に憤然と喰って掛りました。

「誰だつていいじゃありませんか。さあそこをどいて下さい。僕達急ぐんです！」

「何いッ！」

二人は仇敵のように、睨み合いました。

さしずめアメリカ映画なら、ここで僕がこの出しやばり男に痛烈なパンチを喰らわせるか、或は逆にノサレちまうかの、どっちかでしょう。

「おい好江ッ、お前は何をそんなに俺によそよしくするんだ！」

僕はもう本気で腹を立てたのです。自分の女房にそんな態度をとられたら、誰だつて僕のようになったでしょうよ。

ところがね貴方、こう気色ばんで喰って掛る僕を見ると、女房の奴、恐怖に顔をビクビクひきつらせながら、声を震わせて、「わたし、……わたし、あなたを存じませんわ。人違いです！」と、きっぱり言つて除

けたのには仰天しました。

一体何処の世界に亭主のツラを忘れる女があるでしょうか！ 記憶喪失症じゃあるまいし——？

「何だつてお前！ 余り馬鹿にすると——」

あまりの事に、あきれ返つた僕が一層わめき立てますと、又もや色男がのさばり出しました。

「君ッ！ いいかげんにしたまえ！ この人は好江なんて名じゃない。敬子さんだ。全く失敬なッ！ さあ敬子さん、こんな人に構わずに行きましよう！」

「ええ——」

男はさながら忠実な騎士のように、好江の、いや好江そっくりの女の手を取つて、僕を睨みつけ、グングン歩き出しました。

敬子だつて!! 僕はガアン！ と頭を一撃された様な強烈なショックを受け、二人が足早やに立去るのを呆然と見送りました。

「敬子？ 敬子だつて——」

僕は通りに立止つたまま、一人ブツブツ呟いていました。通行人が多勢、僕の顔を妙な目でジロジロ眺めて行きましたよ。

あの二人が、かなり行き過ぎてから、僕の方を一度振り返りました。

「ああ怖かった、ほんとにイヤだわ、まだ胸がドキド

キしているの」

「彼奴、きつと脳がイカれているんだよ」

きつとそんな事を話合っているのに違いありません。僕は、それを想像すると、もう恥かしさで体が火の玉のようになりました。……

「何だ、それじゃ君の奥さんと間違えたのは、他人の空似だったのですね。それにしても、いくらよく似ているにしても——」

呆れ返った私は、話の途中でこう口をはさんだ。男は悄然とうつぶいて、

「でも、でも今思い出しても女房の奴にソックリなんです。耳たぶのホクロまで同じなんです」

「広い世間だもの、よく似た人だって居りますよ」

「そうですかねえ。僕はまだ釈然としないんです」

「ああもしかしたら……私の想像だけど……君の奥さんには、一卵性双生児の姉妹があるんじゃないやありませんか？」

私は、この思いつきに氣をよくして云った。

「いいえ、妻には、女の姉妹は一人もいないんですよ、僕はよく知っているんです」

「それじゃ全くおかしいね。君はいくらか酔っぱらっていたんじゃないの？」

「僕は、全然お酒は飲めないんです」

それじゃやつぱりこの男、精神異常者だ。彼の話は病的な、幻覚妄想に違いない。或は麻薬中毒患者かも知れない。しかし私はまだベンチを立去りかねた。男が又熱心に、奇怪な話を続け出したからだ。――

僕は、強烈な打撃が消えぬままに、病人のような足取りでフラフラ家路を歩いて行きました。事もあろうに、赤の他人を女房と間違えるなんて――ああやつぱりどうかしているぞ。狂人と思われても仕方がないじゃないやありませんか。馬鹿々々！ 苦い自嘲の思いが後から後から湧いて来て胸を痛く締めつけました。我家までの道のりの長かった事。僕は人々の視線を、背中で焼けるように意識しながら、首を落して歩き続けたのです。

我家の玄関の前に立ち、戸に手を掛けようとして、何気なく頭上を見た僕は思わず口アングリの有様です。何故って表札がいつの間にか取替えられているじやありませんか！ 「和田弘次」という古びた木の表札が僕を嘲笑うように掛っているのです。――

僕はあわてて玄関から離れ、改めてマジマジと我家を見なおしました。何度見廻しても同じ事、板塀、小さな庭、無花果やプラタナスの庭木――勿論間違いない

しに我家にきまっています。畜生馬鹿にしてやがる。四月馬鹿じゃあるまいし、悪戯も程々にしろだ！僕はますます腹立しくなってきた。一体何者の仕業だろう？ そうだ、きつと近所の悪戯好きの子供の仕業に違いない。

僕は、むしり取る様に表札をはずすと何かクサクサしたものを振り捨てるように、カラカラと勢良く戸を開け、大きな声で「ただいま」となりました。上りかまちに腰を下ろし、体をかがめて靴のひもを解いていた僕は、登音とともに背後の障子が開く気配に、フト何気なくふり返り、そして思わずアッと叫んで棒立ちになってしまった。いつもなら妻が、エプロン姿で手でも拭きながら、やさしく「お帰りなさい」と迎えてくれる筈なのに——ああ！ そこにいたのは中年の、僕の全く見知らぬ女でした。

彼女は怪訝そうに「どなたでしようか？ 何か御用で——？」と僕に聞くのですよ。

「あんたは……あんたは誰です？」

僕はあえぎました。

「え？ この家の者ですよ。御用件は？」

彼女は、僕の狼狽ぶりを見て、警戒の表情をあらわに浮かべ、こう切口上で云います。

「僕は……僕は、この家の主人です！」

「は？ 主人ですか？ 主人は、まだ工場から帰りません。でも、もう直き帰るでしょうからお待ちになりますか？」

「な、何を妙な事を云ってるんです！ 茶番はもう沢山ですよ。おばさん、女房の奴は——好江は何処にいますか？」

あまりの事に、僕は口をとがらせて抗議したものです。

「好江ですって？——そんな人、家には居りませんよ！ あなた、家を間違えてるんじゃないやありませんか？」

彼女は、ますます疑わしげに眉を寄せて、ジロジロと僕を見詰めました。

「バ、馬鹿も休みやすみ云って下さい。僕は今井利夫だよ、冗談も程々にして下さいよ。僕は二十年も、この家に住んでいるんだ。さあ、そこをどいて下さい！」

僕は大声でわめき立てると、靴をけとばして上り、彼女の胸をグイと押しました。

すると女はキンキン声を張上げて、

「何をするんだい！ あんたこそ突然人の家に来て、変な言い掛りをつけてさ、あんたなんか一度も見た事はないよッ！ いいかい、うちの親父はAセメントの

工員で、私たちはもう三十年も此処に住んでいるんだよ！ 何だいそれを——、さあ用がなかったらすぐ出て行って貰いたいよ。それとも、あんたは盗っ人かい？ さあ出て行かなきゃ、御近所の人をみんな呼ぶよ！」

「何をッ！ この氣違い婆め！」

いやはやもう大変な騒ぎです。全く氣丈なおかみさんで、昂奮逆上した僕とのやりとりに、一步も退かずの勇ましきなんです。あんまり二人が我鳴り合ったので、騒ぎを知った近所の人達が、いやに氣を利かせたらしく、ガラリと玄関の戸が開く音に、ハッと振返った僕の眼に映ったのは、厳しい顔をした一人の若い警官でした。もう万事休すです。

「ああお巡りさん！ この人ったら、先刻から無理な事はっかり云って帰らないんですよ！」

おかみさんは、警官の姿を見るや、ますます威丈高になって、僕には、機関銃のような悪罵の雨を浴せかけました。

「いや、警官、聞いて下さい。この女が……」

僕が、こう哀願するように警官に云い訳しますと、その警官は、手をグイと伸して僕の腕を痛い程つかんで——「よしタツプリ聴いてやろう。さあ交番に来給え」

全く職務の塊りのような非情な男でした。絶望と憤怒と昂奮と疑惑で狂人ようになった僕は、暗い夜道を犯罪者のように連行されて行きました。家の前には、物見高い近所の人達が十数人も集って、僕達を熱心な視線で追っているのです。その人達は、当然僕の知人ばかりの筈なのに、唯の一人も見知った顔が混っていないのです！ それに氣がついた時、僕の全身は水を浴びたようにゾッと震え、眼の前が真ッ暗になった氣持でした。

交番に連行された僕が、警官達の執拗な訊問に、どんなにオロオロしたか御想像下さい。僕は、僕を巡る世にも不思議な一時間を詳しく語って彼らに理解ある同情と判断を求めたのです。だが、僕の得た物といったら、彼等の嘲笑と不信と、底無しの絶望だけでした。ここで僕は、K市もF工業も存在しないという馬鹿げた「事実」をいやという程、知らされたのです。警官は、僕を精神鑑定の必要がある、とニヤニヤ顔でいいました。よし今夜は保護してやろうと。——糞ッ、誰が犯罪者みたいに豚箱なんかに！僕は隙を見て、やにわに交番から逃走し、彼等の靴音と怒声をまいて、迷路のような路地から路地を、野良犬のように駆け抜けたのです。——

昨夜僕は夜通し友人という友人、知人という知人を